



小学校国語科書写における筆ペン指導の実際と実践  
報告：  
学校生活や日常生活に生きる書写学習を目指して

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2024-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮本, 真哉, 長屋, 樹廣 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/0002000126">https://doi.org/10.32150/0002000126</a>

# 小学校国語科書写における筆ペン指導の実際と実践報告

—学校生活や日常生活に生きる書写学習を目指して—

宮本真哉 長屋樹廣

キーワード 硬筆書写 実用書写 生活書写

## 1 はじめに

本稿では、はじめに学習指導要領（平成29年告示(2017)国語編）（以下「学習指導要領」と略す）における筆ペン指導についての記述を整理し、教科書会社二社（光村図書、教育出版）の書写の教科書における筆ペンの取り扱いを比較した。その上で、現在の小学校書写教育の筆ペン指導における課題点を考察し、課題解決に向けて行った「教育実習生の先生へのお礼の手紙を書こう」（第5学年）と、「筆ペンで短歌を書こう」（第6学年）の実践報告である。

筆ペンは、近代の日本で、手軽にどこでも筆文字を書くことを目的として生まれた筆記具である。多彩な筆記具が増え、準備や後片付けに手間と時間がかかる筆や墨の生活の中での使用頻度が落ちていた中で、筆ペンは準備や後片付けが必要ないことや手が汚れにくいことなどをアピールポイントとして、1970年代に発売され、世間に広く知られるようになった。しかし、デジタル機器の隆盛や人間関係の時代による変化などにより、かつては、筆ペンや小筆が使われる場面として多かった、お世話になった人に年賀状や暑中見舞いを書いたり、礼状を書いたりする機会が減ってきている。つまり、「筆ペンで文字を書くこと」の必要感が薄れているのである。呉竹社が1973年に日本で初めて筆ペンを発売してから、今年で50周年である。<sup>1</sup>筆ペンで文字を書くことを通じて、手書きのよさ、筆文字のよさを教師も児童も改めて実感する機会を作りたいと思い、本実践を構想した。

筆ペンだけでなく手書きの機会自体が減少している昨今において、二つの单元では、「手書きの文字の良さ、筆文字の良さに児童が改めて気付くこと」を目標に、授業を行った。

## 2 筆ペンの学習指導要領、教科書における取り扱い

### 2-1 学習指導要領における筆ペンの取り扱い

[第5学年及び第6学年]

エ 書写に関する次の事項を理解し使うこと

- (イ) 毛筆を使用して、穂先の動きと点画のつながりを意識して書くこと。
- (ウ) 目的に応じて使用する筆記具を選び、その特徴を生かして書くこと。

(イ)の指導事項は、第3学年及び第4学年で指導した、「横画や縦画、払いなどの点画の種類に応じた一定の穂先の動き」に加えて、「点画から点画へ、文字から文字へと移動していく過程の穂先の動き」を意識することについて述べている。これらの指導の際には、ばねを生かした強弱やリズムカルな運筆を可能にする毛筆を使用したり、日常で文字を書く条件に近づけるために、小筆や筆ペンなどを使用したりすることを求めている。

(ウ)の指導事項は、手書きの慣習に関わる文字文化に関する事項として位置付けられている。実生活や学習活動の様々な場面において、「誰に向けて(相手意識)」「何のために(目的意識)」など具体的な目的に応じて、筆記具を選ぶことができるようになることを求めている。筆記具の例として、鉛筆、フェルトペン、毛筆、ボールペン、筆ペンが挙げられている。筆記具の「特徴」とはここでは、筆記具全体の形状、書く部分の材質や形状、色などのことを指す。押木ら(2020,26)はこれを具体的に、筆跡の太さ、濃さ、保存期間、消せるか否かなどの視点から、筆記具の選択を考える必要があることを述べている。また、筆記具に適した用材にも配慮する必要があることもここでは述べられている。

伊藤(2022,4)は筆記具の選択の妥当性について、筆記具による線の太さの違いに触れ、児童生徒それぞれの筆圧が異なるため、その子に合った筆記具の選択が必要になると述べている。また、正しい筆記具の選択により、児童生徒が「上手く書けた」という経験をすることができることも述べている。

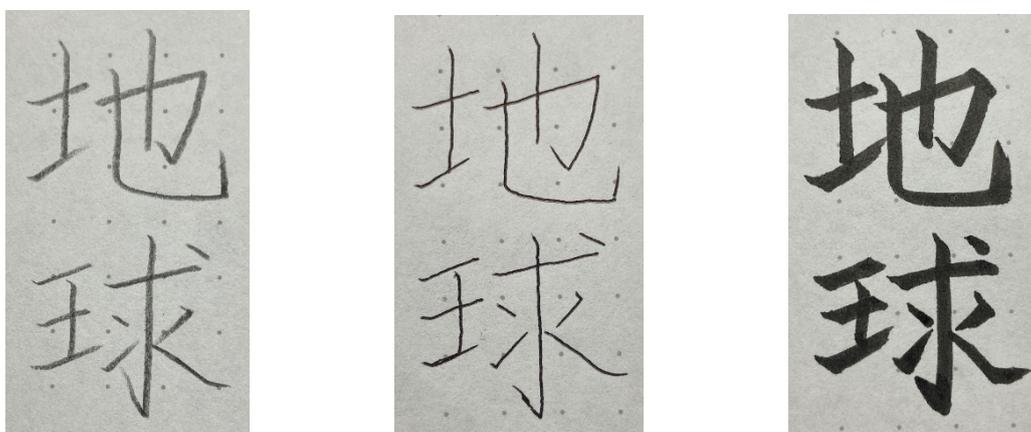


図1 三つの筆記具で書き比べた「地球」

筆記具の違いによって視覚的に受ける印象の違いは大きい。図1は稿者が「地球」という言葉を鉛筆(左)、0.37mmボールペン(中央)、筆ペン(右)で書いたものである。線の太さは当然異なり、とめ・はね・はらいなどの筆法のわかりやすさも異なる。ボールペンで書いた字はどこか無機質的な印象を受けるのに対して、鉛筆や筆ペンで書いた字はどこか温かみを感じる。筆ペンで書いた字からは、作品のような印象も受ける。これらの違いも児童は実際に文字を書く中で感じている。これまで見てきた児童の中で、鉛筆では上手く書けないが、サインペンなら上手く書けた気持ちになる児童もいれば、その逆の児童もいた。字形のきれいさは同じなのに、筆記具の種類によって、書いた本人にとっても、納得度が異なるのである。それほど筆記具の選択は、書き手にとって重要な要素であると言える。

学習指導要領に提示されるこの二つの指導事項を見ると、小学校国語科書写の授業における筆ペンの活用例として、点画相互及び文字と文字とのつながりを意識して文章や言葉を書く学習活動や、筆記具の特徴やよさを目的に応じて生かすことができるように適切な筆記具や用材を選択してポスターや学級新聞などを作成する学習活動が想定される。

## 2-2 教科書における筆ペンの取り扱い

学習指導要領で示された二つの指導事項のうち、筆記具の選択の指導で掲載されている例が、図2、図3の『書写 五年』（光村図書）である。

図2では、新聞やポスターを書く際に、意識することとして、「文字の配列や大きさを工夫すること」「行頭と行末をそろえること」と並んで、「筆記具を内容によって使い分けること」を挙げている。ここでは場面に応じて、文字の大きさや特徴、線の太さなどを踏まえて、筆記具を選択することを求めている。また、色の組み合わせについても書かれており、カラーペンだけでなく、黒以外の色の筆ペンを用いることも選択肢として考えられる。

図3では、六年生を送る会に向けて、プログラムや寄せ書きを書くために、これまでの学習を生かす活動の単元である。ここでは、筆記具の選択に加えて、用紙を選択することも求めている。例えば、模造紙に大きい題字を書くために毛筆を選択したり、色紙にはインクがにじみにくいフェルトペンや筆ペンを選択したりする活動などが考えられる。

『書写 五年』（光村図書）には、手紙の書き方について、巻末資料として掲載されている。しかし、そこにはボールペンや筆ペンなどの筆記具の選択はなく、便箋に書く場合の様式や文字の大きさ・配列についての記載のみである。

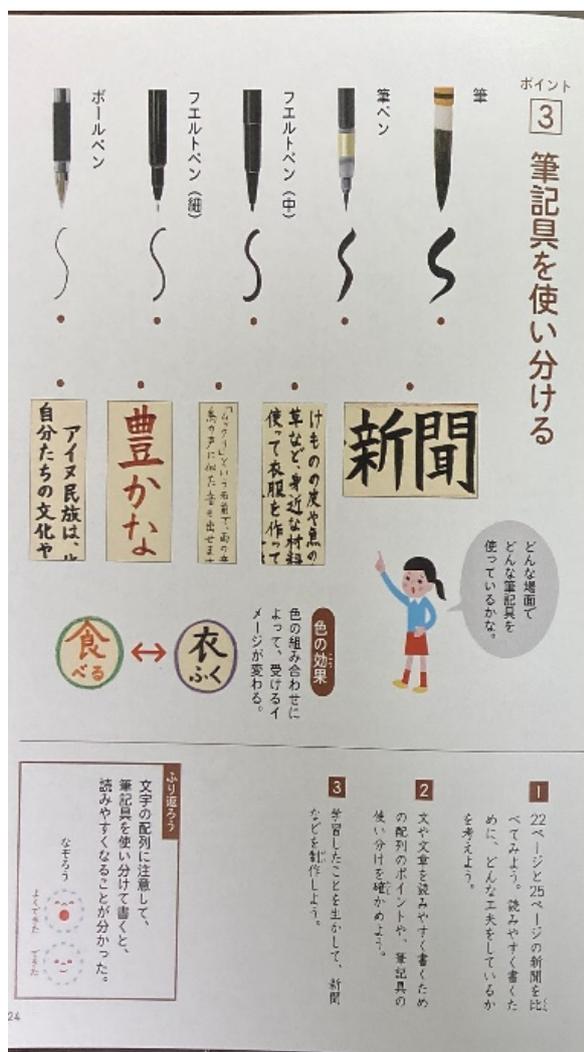


図2 新聞制作活動における筆記具の選択



図3 筆記具と用紙の選択

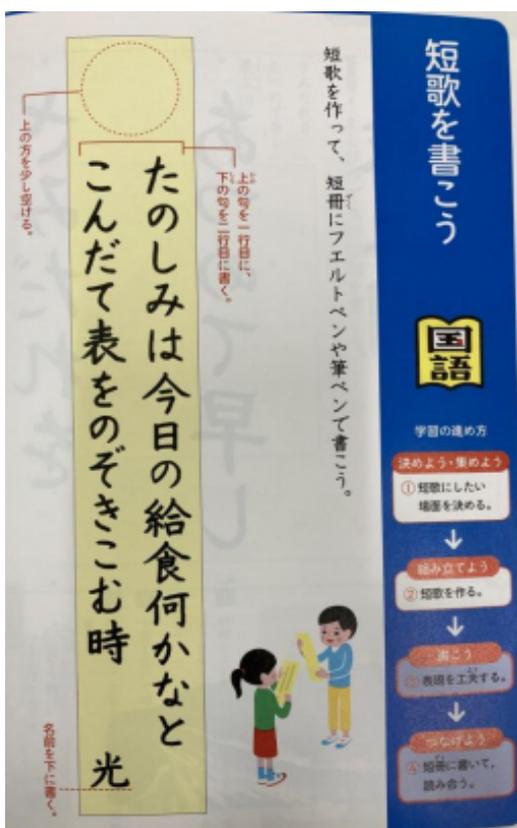


図4 短歌を書く活動



図5 筆記具を選択する観点

次に、『書写 六年』（光村図書）（図4）を見てみると、ここでは短歌を書く活動として、短冊に筆ペンやフェルトペンで書くことを求めている。この単元では、紙面に合わせて短歌の構成や配置を工夫することが目的となるため、筆記具の選択自体は重要な要素ではない。一方で、日本の伝統文化である「短歌」を、鉛筆やボールペンなどではなく、筆ペンやフェルトペンで書くことによって、芸術作品として完成させる文化的な側面があるように感じる。

また、『書写 六年』（光村図書）には、これまでの六年間の書写の学びを振り返るガイドブックも付録として掲載されており、そこに掲載されている「筆記具図鑑」の中に筆ペンもある。

今回第6学年で実践した「筆ペンで短歌を書こう」は、図4の単元を稿者がアレンジしたものであり、「紙に対する文章の配置を工夫すること」と、「相手意識を持って短歌を作品として書く活動を通して、筆ペンや筆文字に親しむこと」の二つを目的として、単元構想した。

最後に、『小学 書写 五年』（教育出版）（図5）を見てみる。ここでは、委員会のポスターを作成する中で、筆記具の選択が取り扱われている。他の教科書と異なる点は、「線の太さ」「どんな用紙に合うか」など具体的な観点が提示された上で、それぞれの筆記具の特徴を話し合う活動が設けられている点である。この活動によって、それぞれの筆記具の良さに気付くきっかけになり、学校生活や日常生活に生かすことにもつながる。一方で、短歌や年賀状を書く単元も掲載されているが、サインペンや小筆を選ぶようになっており、筆ペンは選択肢にない。

ここまで二社の教科書を見てきたが、筆記具の選択の指導としてのみ、筆ペンが掲載されていることがわかる。反対に、学習指導要領の(イ)の指導事項に関わる単元では、筆ペンや小筆の活用については、全く触れられていない。

### 2-3 小学校国語科書写教育の筆ペン指導の課題点

学習指導要領と教科書会社二社のそれぞれの学年の教科書における筆ペンの取り扱いについて整理すると、表 I のようになる。

表 I 現行学習指導要領と教科書における筆ペンの取り扱い

		教科書における筆ペンの取り扱い		
		『書写 五年』 (光村図書)	『書写 六年』 (光村図書)	『小学 書写 五年』 (教育出版)
学習指導要領における筆ペンに関する指導事項	(イ) 毛筆を使用して、穂先の動きと点画のつながりを意識して書くこと。	記載なし		
	(ウ) 目的に応じて使用する筆記具を選び、その特徴を生かして書くこと。	・筆記具を選択し、ポスターや新聞を書く活動	(・配置や構成を工夫しながら、短冊に短歌を書く活動) ・筆記具図鑑	・筆記具の特徴について話し合い、筆記具を選択し、ポスターを書く活動

表1を見ると、学習指導要領では筆ペンの指導について、「穂先の動きや点画のつながりについて、毛筆の弾力性を生かして筆ペンでも応用すること」と、「筆記具の特徴を整理した上で、目的や場面に応じて適切に筆記具を選択すること」が例示されているが、教科書では、他の筆記具とまとめて、筆記具や用紙の選択でのみ扱われていることがわかる。『小学書写 五年』（教育出版）では、筆記具の選択の観点を具体的に提示されているが、光村図書の教科書では、筆ペンに限らずそれぞれの筆記具の特徴や良さなどについて話し合ったり、色々な文字や文章を書き比べたりするなど、丁寧に学習する機会はほぼないことがわかる。

また、指導事項の(イ)にあたる「穂先の動きや点画のつながりの指導」と関連付けて、筆ならではの弾力性を生かして筆ペンでも応用する学習活動については、どの教科書でも扱っていないことも筆ペンと児童たちとの距離を作ってしまう原因になっているのではないだろうか。稿者も勤務校の中で、教科書には掲載されていないが、穂先の動きや点画のつながりを筆ペンと関連付けている授業を見たことがない。この課題は、筆ペンの特徴やよさ、筆ペンと毛筆との共通点や相違点について、児童だけでなく、教師も気付く経験が不足していることが起因している可能性がある。実際に筆ペンを使って文字や文章を書いた経験が少ないため、筆ペンを生かせる授業場面を作り出すのが難しいのである。この指導事項では「日常で文字を書く条件に近づける」という目的で、筆ペンの活用が例示されているため、

筆ペンの活用によって毛筆と硬筆とのギャップを少なくし、毛筆での学びを硬筆に生かす必要がある。伊藤(2022,4)は、毛筆と硬筆とをより関連させた指導を行うためには、筆ペンの活用が有効であると述べている。伊藤は、中学校と高等学校での書作品の創作活動の授業実践を行う中で筆ペンを取り入れた。鉛筆で草稿を作り、筆ペンでより具体的な作品のイメージを立て、毛筆で表現する。このように、毛筆と硬筆の間に筆ペンを挟むことによって、硬毛関連の重要性を生徒が実感しやすくなることを提唱している。この実践は、中学校・高等学校の好きな漢字一字を書くという創作活動の中での硬毛関連ではあるが、小学校でも、毛筆と硬筆とのつながりに児童が気付くきっかけを作るための手立てを示してくれている。学習指導要領に「毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導する」とあるように、毛筆学習と硬筆学習とを往還しながら、日常生活における書字活動に生かしていくためにも、筆ペンの有用性を検証していく必要がある。

また、書写の授業で育成する資質・能力について、学習指導要領では、「文字を正しく整えて書くことができるようにするとともに、書写の能力を学習や生活に役立てる態度を育てること」としている。書写の授業を通して獲得した知識や能力を他の学習や生活に役立てるためには、学習や生活に役立てられるような機会や具体的な場면을教師が提供・例示する必要がある。押木ら(2020,4)は「書写の能力を学習や生活に役立てる」例として、他の学習活動でのノートやワークシートへの記入、校外での諸活動を含むメモやお礼状、掲示物などに役立てることを挙げている。また、長い手書きの歴史の中で形成された習慣を、文字文化として理解し、〈書くこと〉を主体的に考えようとする態度を育成することの重要性についても触れている。

この「〈書くこと〉を主体的に考える」とは、稿者は文字そのものや手書き文化、筆記具などの文字に関する文化に、児童自らが関わり、学校生活や日常生活に生かすことだと考える。つまり、具体的な生活の場面を想定して、筆ペンを使って文章を書いたり、作品を作ったりする活動を取り入れ、授業以外の学校の活動や日常生活に生かす態度を育てる必要がある。そのためには、書写の授業を生活と結び付けて展開する必要があり、本実践では、筆ペン学習の目的意識・相手意識を生活の中で見つけることを重視した。

これを受けて稿者は、「文字文化として筆文字・筆ペンに慣れ親しむ活動」と、「筆ペンを使って手紙や短歌などの作品を創り上げる活動」の二つの活動を取り入れた単元を構想した。

### **3 授業実践**

#### **3-1 単元の1時間目について**

本実践は、稿者の勤務校である北海道教育大学附属釧路義務教育学校前期課程の第5学年2学級と第6学年2学級を対象に行った。それぞれの学年で扱った単元は異なるが、単元目標は以下の同じ目標を設定した。

**単元目標**  
**筆ペンで手紙の文章を書いたり、短歌作品を作ったりする活動を通して、筆文字の良さや筆ペンの特徴、良さに気付くことができる。**

それぞれの授業の2時間目の成果と課題については、3-2 実践例① 第5学年「実習生の先生へのお礼の手紙を書こう」(2時間目)と、3-3 実践例② 第6学年「筆ペンで短歌を書こう」(2時間目)で述べていく。

**(1)「文字文化として筆文字・筆ペンに慣れ親しむ活動」の構想(両単元の1時間目)**

二つの授業実践(実践例①、実践例②)において、単元の1時間目はほぼ同じ活動を展開した。(表Ⅱ)

**表Ⅱ 両単元の1時間目の流れ**

	○主な学習活動 ●教師の発問・声かけ		☆手立て
	実践例①	実践例②	
導入	○筆ペンとはどのような筆記具か、どのような場面で使われるかを全体で確認する。 ●「筆ペンって使ったことある？」 ●「筆ペンってどんなところで使われている？」 ○筆ペンや筆文字の特徴や良さについて考える。 ●「筆ペンの良さって何だろう？」		☆筆ペンを使ったことがない児童が想像しやすいように、筆ペンあるいは小筆で書かれた手紙や、年賀状、お年玉袋などを写真で黒板に提示する。
展開	○筆ペンで文字を書くことに慣れるために、ワークシートを使って練習する。 ●「実際に筆ペンで字を書いてみて、書きやすい？」 ●「筆ペンの良さ、書いてみて気付くことあった？」		☆筆ペンで文字を書くことに慣れ親しむために、書く機会の多い平仮名五十音や、自分の名前を漢字で練習する。平仮名五十音については、教科書に載っている筆ペンで書かれた手本を見るように指示する。 ☆机間指導しながら、筆ペンの書き心地について、児童と交流しながら、筆文字の良さを児童が感じられるように声かけをする。(手立て①) ☆文字を書くスピードに個人差があることを踏まえて、早く書き終えた児童用にマス目のみのワークシートを用意し、色々な言葉を練習する。(手立て②)
	○平仮名五十音、自分の名前(漢字)、実習生の先生の名前(漢字)を筆ペンで練習する。	○平仮名五十音、自分の名前(漢字)、短歌に使われている言葉を筆ペンで練習する。	
	○ワークシートを書き終えたら、マス目だけのワークシートを用意し、自分の名前や好きな言葉を筆ペンで書いてみて、筆ペンや筆文字に親しむ。 ●「より筆っぽい字を書くためには、どんなことを意識するといいのかな？」		

ま と め	○2時間目への見通しを持つ。 ●「実習生の先生に手紙を書く時には何を意識したい？」 ●「丁寧に書くって具体的にはどんな風を書くの？」 ●「実習生の先生に伝えたいそれぞれの思いがあるんだね。それが伝わるように丁寧に書こう。」	○2時間目への見通しを持つ。 ●「完成した短歌は教室に掲示するので、色々な先生や参観日には保護者の方も見ることになりま す。」 ●「短歌をどんな風を書くといい だろう？」 ●「筆ペンならではの線の強弱が表現できるといいんだね。」	☆手紙、短歌それぞれを作品として完成させるにあたり、「何のために書くのか(目的意識)」「誰のために書くのか(相手意識)」を改めて明確にし、2時間目の活動につなげる。(手立て③)
-------------	--	---	--

## (2) 単元の1時間目の手立てと成果・課題について

二つの単元の1時間目における単元目標に近付くための手立てを表Ⅲに整理した。

表Ⅲ 両単元の1時間目の3つの手立て

<p>☆ 手立て① ●「筆ペンの良さ、書いてみて気付くことあった？」 筆ペンで文字を書いたことがない児童や、前に使ってから時間が経っている児童がいることも踏まえて、筆ペンで文字を書く前と書いた後で筆ペンの良さや特徴について、新たに気付いたことがあったかを机間指導をしながら確認する。また、過去に使った筆ペンと書き心地が違う場合もあるため、筆ペンにも様々種類があることも説明する。</p> <p>☆ 手立て② ●「より筆っばい字を書くためには、どんなことを意識するといいのかな？」 筆ペンで文字を書くことに慣れるために、書く頻度の高い平仮名五十音、自分の名前の漢字などを練習するワークシートを用意し、自由に練習させる。文字の美醜に関わらず、文字を書くスピードには個人差があるため、早く文字を書き終えた児童のためにA4用紙に5×10マスの練習用紙を印刷しておく。追加で練習する児童には、筆ペンに多少慣れてきた段階であることも踏まえて、筆っばい字を書くためにはどんな筆ペンの使い方ができそうかを机間指導で声をかけながら考えさせる。</p> <p>☆手立て③ ●「実習生の先生に手紙を書く時には何を意識したい？」 ●「短歌をどんな風を書くといいだろう？」 次時への見通しとして、最終的には筆ペンで何を書くのかを再確認する。手紙、短歌を書く目的(目的意識)、誰にそれを見せるのか(相手意識)を全体で改めて確認した上で、何を意識して手紙、短歌を書きたいかについて、児童それぞれにイメージを持たせる。</p>
---

### 手立て①について

筆ペンの特徴やよさについて、実際に筆ペンを使う前に想像していたことと、使った後に気付くこととは違いがあるのは当たり前である。そのため、机間指導の中で、児童がワークシートで練習する様子を観察して、つぶやきながら書いている児童や、普段のノート指導で気になっていた児童などに声かけを行った。実践例①の時に、楽しそうに文字を書いている児童A(図6)と、慣れない筆ペンに少し苦戦しながら文字を書いている児童B(図7)に声をかけた。

児童Aは普段から文字を書くことが好きで、丁寧に書こうとする意識も強い。これまでに筆ペンを使ったことがないため、筆ペンの特徴やよさについて、筆ペンを使う前にはあまりピンと来ていない様子だった。しかし、実際に筆ペンを使ってみると、「鉛筆よりは書きにくいけど、これはこれで楽しい。」「線の太さに違いが出るのが面白い。」とつぶやきながら練習している様子が見られた。児童Aに筆ペンで文字を書いた感想を尋ねてみると、「難しいけれど、慣れたら筆っばい字を書くことができるようになってくる。」と答えていた。

児童Bはノートを書くときには丁寧に文字を書こうとする意識が強いため、他の児童よりも書くスピードが遅い。児童Bはこれまでに筆ペンを使ったことがあったが、毛先がより毛筆に近いタイプの筆ペンを使ったため、上手く書けなかったと話していた。今回使った筆ペンは初めて筆ペンを使う児童にも書きやすいように、毛先が細字タイプのもので、先割れがしないプラスチックのものを選んだ。そのため、児童Bが以前使った筆ペンとの違いに練習の中で気付くかもしれないと思い、机間指導の中で練習の様子を観察すると、練習しながら「児童Cが言っていたみたいに、小筆みたいなのに、手が汚れない。」とつぶやいていた。児童Bにも筆ペンの書き心地を聞いてみると、「前に書いた(使った)ものよりも書きやすいけど、筆っぼい感じは前の方がする。」と話していた。また、「でも、筆で書いている感じはするから、習字の時みたいに書くスピードはゆっくりになる。」とも言っていた。いつもよりも丁寧に書こうとする気持ちは強かったのか、今回のワークシートの練習でも他の児童よりも進まなかったが、この時間は筆ペンで文字を書くことを楽しみ、親しむことが目的のため問題はなかった。児童Bの書いた文字を見てみると、本人が言っていた通り、筆っぼさはあまり感じられないが、同じ筆ペンでも色々な種類があり、その書き心地も種類によって異なることを知る機会になったとも言える。

この児童Aと児童Bの変容こそが、「実際に筆ペンを使って文字を書いてみなければ、筆ペンの特徴やよさがわからない」ことを表しているように感じた。

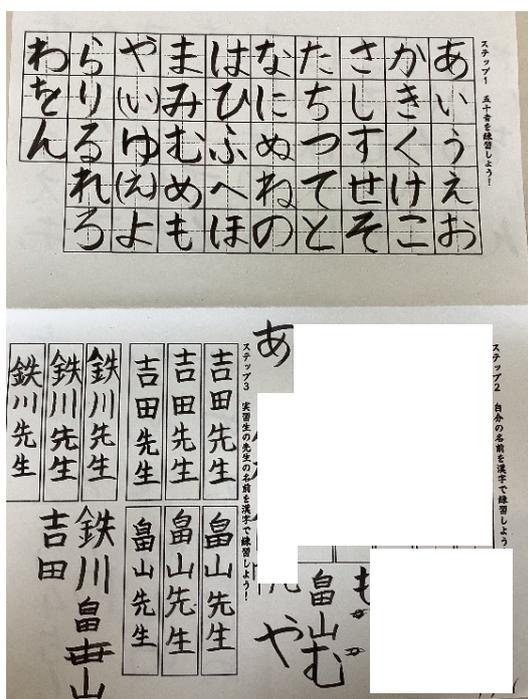


図6 児童Aのワークシート

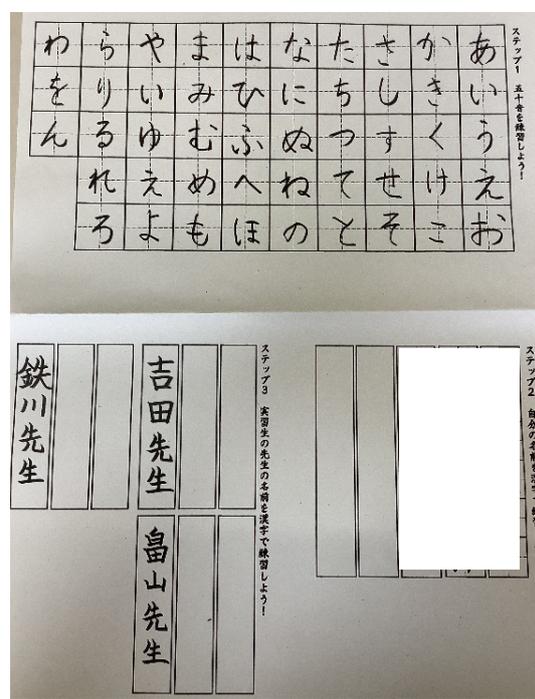


図7 児童Bのワークシート

### 手立て②について

1枚目の練習用紙を終えて、筆ペンで文字を書くことに少しずつ慣れてきた段階で、より筆っぼい字を書くためには、どのような書き方、筆記具の使い方ができるかを机間指導の中で児

童と交流した。筆ペンの特徴や良さとして、毛筆で書いたような筆文字を“手軽に”“小さく”書くことができることが挙げられる。筆ペンや筆文字に親しみ、2時間目の時間に手紙や短歌作品を書く活動で、生き生きとした文字や文章を書くためにも、より筆らしい文字を書くための筆法やリズムなどに気付かせたいと考え、この手立てを用意した。

児童と交流する中で、筆っぽい字を書くための方法について、「線に強弱をつけたり、文字の大きさに太さを調節したりすることが大切」、「筆のばねみたいな感覚に慣れれば、線に違いが出る」、「わざとらしくはねやはらいをおおげさに書くと筆で書いたみたいになる」など多様な意見が出た。これらの児童たちのつぶやき・気付きを教師もつぶやきながら、教室を回ること、他の児童が文字を書く時にも生かすことができた。

一方で、1枚目の練習用紙を早く書き終えるために、雑に文字を書きワークシートを埋める作業に近かった児童の姿も見られた。これらの児童に対して、学習活動の目的を改めて確認する時間を設けたり、字の練習だけでなく、直線や曲線などを練習し、筆ペンの線の強弱を楽しめるワークシート（図8）を用意したりするなど、筆ペンで文字を書くことを楽しめるような工夫があることでより熱心に学習活動に取り組める児童が増えたと考える。

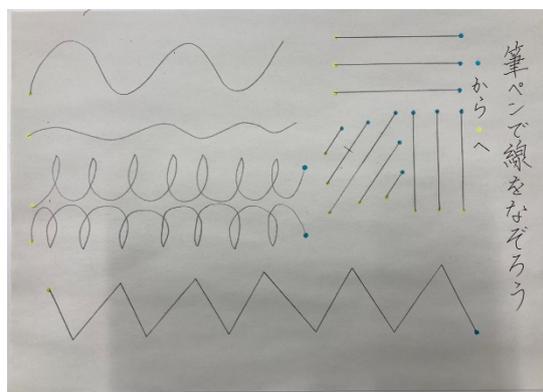


図8 補助ワークシートの例

### 手立て③について

1時間目の時間は、「筆ペンに出会い、実際に筆ペンで色々な文字を書く時間」として設定したが、2時間目へのつながりも踏まえて、活動のゴールを改めて確認した。

実践例①（図9）については、実習生の先生への手紙を書くことがゴールとして設定されているため、手紙を書くという目的意識と、実習生の先生に書くという相手意識を再確認するために、「実習生の先生に手紙を書く時にはどんなことを意識したらいいか。」を児童に聞いた。児童の多くから「丁寧に書こうとする気持ち」という意見が出た。この気持ちは、人に手紙を書く目的意識と相手意識があるからこそ生まれるものである。「丁寧に書く」ことについて、さらに深掘りしたところ、「とめ・はね・はらいを意識すること」や「自分ができる最大限の字を書くこと」、「想いを込めて書くこと」が挙げられた。「丁寧に書く」ことは人によって捉え方が異なる。姿勢や鉛筆の持ち方を意識する児童もいれば、書くスピードや字を間違えないことを意識する児童もいる。とめ・はね・はらいなどの筆法や文章が真っ直ぐになるようにするなど技能的な要素も、自分ができる最大限を発揮するなど精神的な要素もどちらも大切にしたい意識である。一方で、相手に対して想いを込めて書くことは共通であると考え、5週間の中で学校行事をともに乗り越え、休み時間にたくさん遊んだ実習生の先生への「想い」についても、児童それぞれが伝えたい想いは異なり、相手の実習生の先生によっても異なる部分であ

る。それぞれの想いが伝わるように、丁寧に書くことを2時間目の目標とすることで、目的意識・相手意識を醸成することにつながった。

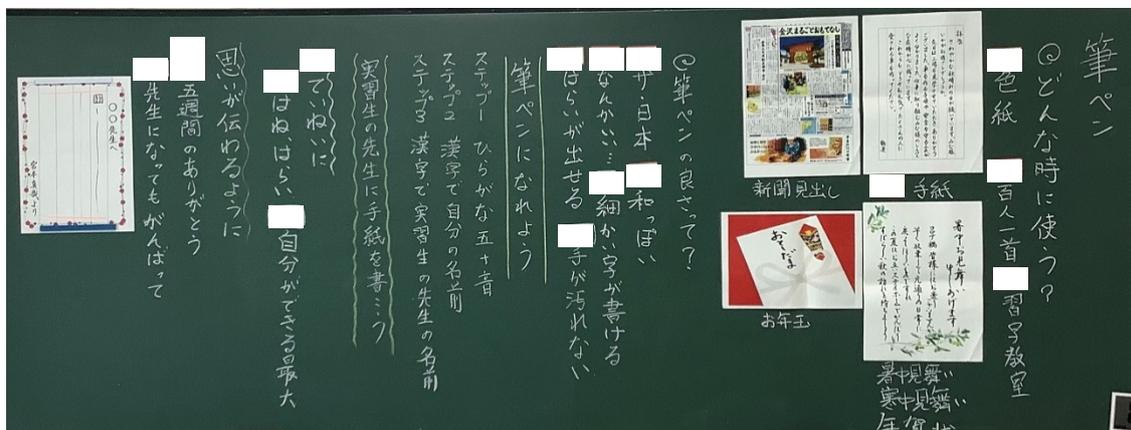


図9 実践例①の1時間目の板書

実践例②については、参観日に教室に掲示する短歌作品を短冊に書くことをゴールとして設定した。夏休み後に国語科の授業内で作成した短歌を短冊に書き、作品として完成させることを目的とし、教室に掲示することにより、教室に出入りする様々な先生や参観日には保護者の方々が見ることを伝えることで相手意識を持たせた。保護者が見ることを伝えると、恥ずかしさや自分の字にコンプレックスを抱えていることからネガティブな感情を持つ児童も見られた。実践例②の対象学年の発達段階・実態として、思春期に突入している児童も見られ、自分が作ったり書いたりしたものを保護者や大人に見られるのが、恥ずかしい感情が大きかったことが考えられる。また、これまでの書写の授業や書字活動の中で、教科書の手本や、同じクラスの字がきれいな児童が書いたものと見比べて、その違いから自分の書いた字に誇りや自信を持つ経験が少なかった児童も多い。そのため、短冊に短歌を書く以外に、色紙に自分の伝えたいイメージをもとに表現するような、美醜だけにとらわれない学習活動を用意することも必要だったかもしれない。相手意識の醸成についても、作った短歌作品の鑑賞会や句会を学年や高学年ブロック交流で行う、中央廊下に掲示して下の学年の児童に公開するなど、同学年や下学年に対して相手意識を持たせる工夫の方が、学習活動への意欲向上につながった可能性がある。

### 3-2 実践例① 第5学年「実習生の先生へのお礼の手紙を書こう」(2時間目)

実践例①は2時間連続で授業を行ったため、1時間目の終わりに確認した目的意識・相手意識を継続したまま、2時間目の授業に入ることができた。また、2時間目の学習活動として、手紙の書き方について簡単に全体で確認した後は、個人の活動になったため、授業の流れについては省略する。手紙に書く文章については、週末の課題としてiPad上で一人一人の実習生の先生方に思いが伝わる文章を考えてきていた。そのため、授業時間の都合上、授業内では多少の文章の修正のみにし、文章の内容を再検討する時間は取らなかった。授業実践日は、教育実習終

了の二日前ということもあり、時間的にも余裕がなかったが、児童たちは実習生の先生への思いを継続したまま、手紙を時間内に完成させようと努力していた。

2時間目の成果と課題については、表Ⅳに整理した。

表Ⅳ 実践例① 2時間目の成果と課題

成果	課題
<ul style="list-style-type: none"> <li>・45分間を通して、集中して実習生の先生に手紙を書く姿が見られた。</li> <li>・児童それぞれが持つ実習生の先生への思いが伝わるように、丁寧に書く姿が見られた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手紙の文章量や手紙を書き終えるまでの時間に個人差があることを想定して、早く書き終えた児童に対しての手立てがなかった。</li> </ul>

成果については、児童が1時間目の授業から集中力と丁寧に書く意識を継続して、手紙を書く活動に取り組む姿(図10)が見られたことが挙げられる。児童たちそれぞれが「思いを伝える」ために「丁寧に書く」ための雰囲気自主的に作っている姿も見られ、教室全体でいい手紙を作り上げようとする空気ができていたと言える。実際に児童が書いた手紙(図11)を見てみると、実習生の先生に伝えたい思いを乗せて、一字一字をしっかりと丁寧に書いていることがわかる。この児童は、普段は物静かであり発言しない児童である。今回、実習生の先生へと思いが伝える手段として、手紙を書く活動を取り入れることにより、言葉では思いが伝えづらい児童も、感謝の気持ちやこれからの応援の気持ちを伝えることができた。

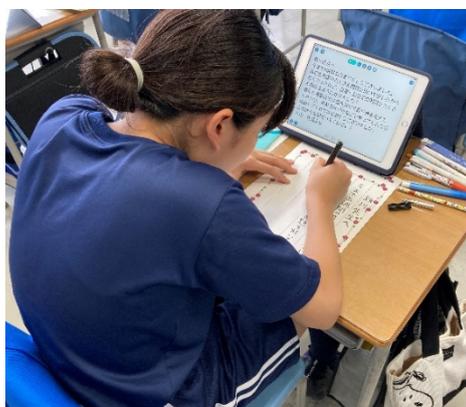


図10 集中して手紙を書く児童の姿

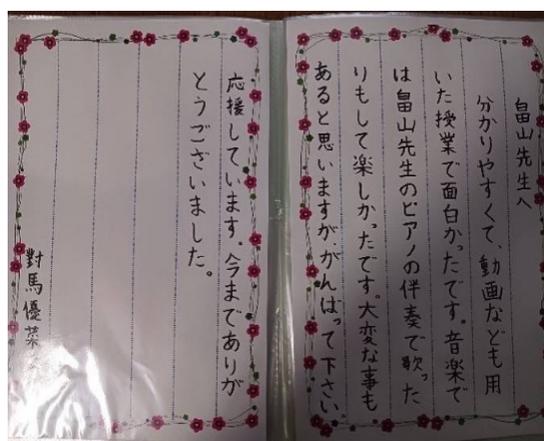


図11 実際に児童が書いた手紙

課題については、児童それぞれの手紙の文章量に個人差があることを考慮していなかったことが挙げられる。便箋一枚で書き終える児童もいれば、二枚目の最終行まで書く児童もいる。さらに、児童の文章を書くスピードにも個人差があるため、手紙を書き終える時間に差が生まれた。この差が生まれることは、自然なことであり、防ぐことができない。この差を減らすのではなく、早く書き終えた児童のために、筆ペンで自由に文字を書いて楽しむ活動を用意しておく必要があった。具体的には、これまで教科書で学習した文学作品を筆ペンで視写したり、好きな歌の歌詞や自分が好きな言葉などを筆ペンで自由に作品として書いたりするなど、筆ペンに親しむことができるような活動が挙げられる。筆ペンで文字を書くことにある程度慣れてきた児童が、それぞれの筆ペンの楽しみ方を見つけることが出来れば、単元目標により近づけたと感じる。

### 3-3 実践例② 第6学年「筆ペンで短歌を書こう」(2時間目)

単元の1時間目の翌日に授業を行ったため、改めて短歌を書くという学習活動の見通しを持たせてから授業に入った。この単元は、前述の通り、『書写 六年』（光村図書）では短冊に対して、文章の配置や構成を工夫して短歌を書く単元である。また、実践を行った学年は、稿者が別に研究している、ICT活用による書写の授業内での課題解決型学習の実践学年でもある。研究目的やICT活用の目的・方法・場面の精査、成果と課題などについては、別稿で述べることとする。

授業の流れとしては、はじめに自分の考えた短歌を試書し、文章の配置や構成の観点から自己課題を設定する。自己課題解決に向けて、教科書を基に練習方法を考え、ワークシートで練習する。最後に清書として、本番の短冊に清書を書き、振り返りを記述した。片方のクラスでは、紙のワークシートで、自己課題と振り返りの記入（図12）を行い、もう一方のクラスでは、ロイロノートを用いて、自己課題と振り返りをデジタルワークシート（図13）に入力させた。

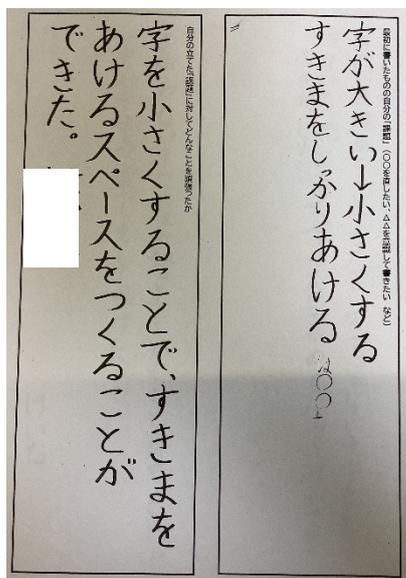


図12 紙のワークシートによる  
自己課題と振り返り

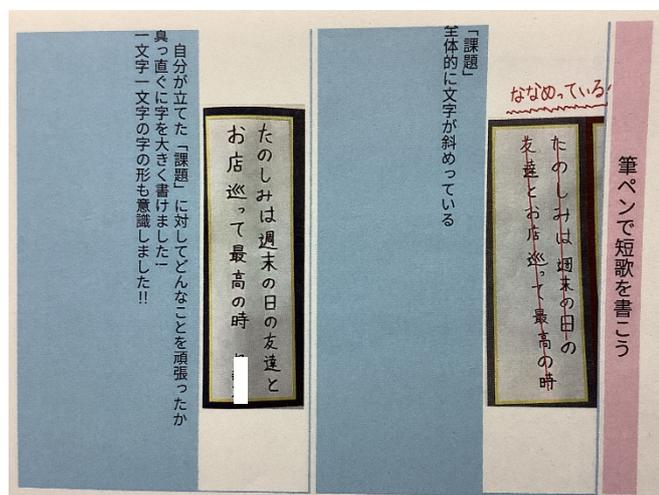


図13 デジタルワークシートによる  
自己課題と振り返り

2時間目の成果と課題については、表Vに整理した。

表V 実践例② 2時間目の成果と課題

成果	課題
<ul style="list-style-type: none"> <li>・45分間の中で短歌作品を作り上げるといった目的意識が継続され、よりよい作品を書こうと試行錯誤する姿が見られた</li> <li>・筆ペンを使ったことでより作品を作っているという感覚が児童たちに生まれ、筆っぼい書き方を意識している姿が見られた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作品の様式について、ルールを設けなかったため、短歌を二行で書く児童もいれば、三行で書く児童もいた。</li> <li>・自己課題や振り返りの記述・入力に時間がかかり、練習する時間を十分に確保することができなかった。</li> </ul>

成果として、児童の多くが「かっこいい作品を作りたい」という意識を強く持ち、配置や構成を適宜見直し、試行錯誤しながら練習したり、筆ペンのよさを生かすために、とめ・はね・はらいなどの筆法を意識して文字を書いたりしていたことが挙げられる。夏休み明けの国語の授業内で作成した短歌を、「作品」として完成させる意識を持たせるために、短冊の色を児童に選ばせた。また、教科書に載っている短冊作品を例として、児童に見せることにより、完成図を具体的にイメージさせた。実際に、児童が作った短歌作品は図14の通りである。また、教室に掲示した短歌作品は図15で示している。どの作品も短冊に体裁よく書かれており、一字一字を見ても、作品としてよいものを作ろうとする気持ちが伝わってくる。複数枚書いた中から清書を選ぶ時には、どの作品を選ぶか迷っている様子も見られ、楽しみながら作品製作に励んでいた。相手意識の醸成は上手くいかなかったが、よりよい作品を作り上げるといった目的意識をもったことによって、このような児童の姿が見られたと感じている。

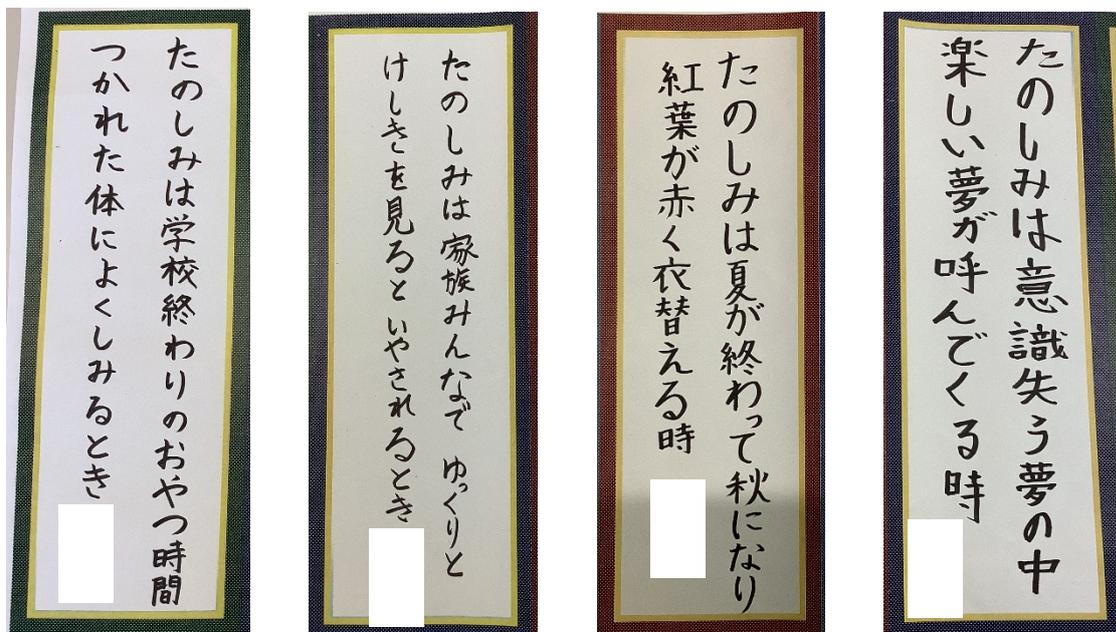


図14 児童の短歌作品



課題としては、短歌の様式として、二行で書くという指定をしなかったため、三行で書く児童や、四行・五行で書く児童もいた。(図15下図)短冊に対して、最も体裁よく書くことができるのは、二行で書く場合であり、『書写 六年』(光村図書)にも二行で書くことを想定して、書き方が提示されている。そのため、自己課題を解決するために、教科書を参考にしながら練習方法を検討するのだが、三行や四行で書いた児童が、練習方法に困っている様子も見られた。机間指導しながら、三行で書いた児童には、それぞれの行頭の位置に着目させ、バランスよく書くように練習させた。四行で書いた児童には、三行で収めてもらい、同じく行頭の位置に注目させた。

また、別の課題として、前述の通り、ICT活用による課題解決型学習の授業実践でもあったため、自己課題の記入/入力、練習方法の検討、振り返りの記述/入力と、普段の授業よりも、活動の量が多くなってしまい、練習時間を十分に確保することができなかった。また、ICT活用学級については、ロイロノートの活用について、稿者が不慣れなこともあり、余計な時間がかかってしまったことも原因として挙げられる。書写の授業内で自己課題の設定、振り返りを行うことに児童も慣れておらず、活動に戸惑っている様子も見られた。単元の目標だった「筆ペんに親しむ」という目的がぶれ、中途半端な活動になってしまった。この時間の学習活動は筆ペンを使って手紙や短歌などの作品を創り上げる活動のため、45分間の中で筆ペんに親しむことと課題解決型学習を同時に行うのは少し難しかったかもしれない。

この二つの課題を解決し、単元目標達成へ近付くための方策の一つとして、今回は筆ペんに親しむことに絞り、紙を短冊ではなく、色紙を用意し、筆ペンを使って短歌を色々な形式で作品製作を楽しむ活動にすることが挙げられる。

#### 4 おわりに ～これからの書写教育における筆ペン指導とは～

今回の実践では、「手紙や短歌などの作品を創ることを通して、筆ペんに親しむこと」を目標に掲げた。実践の中では、楽しみながら筆ペンで文字を書く姿や、手紙や短歌をよりよい作品として完成させようと集中して取り組む姿が見られた。筆ペンという筆記具に初めて出会った児童もいれば、久しぶりに使った児童もいた。このように児童の筆ペンの使用経験に差がある中で、多くの児童が筆ペンを楽しみながら活用できたのは、学習活動の中に目的意識と相手意識をもてた影響は大きかっただろう。

二つの単元で目指したのは、全ての児童が“筆ペン”を効果的に使えることではなく、これからの学校生活や日常生活の中で、“筆ペン”が使えるような・使ってみたいと思えるような場面に出会ったときに、思い出せることである。委員会活動で作成するポスターや新聞、学級の係活動で作成している毎月の目標など、筆ペンや筆文字が使えるような場面は学校にはあふれている。休み時間に自由帳に好きな言葉を筆ペンで書くのも楽しいし、ポストカードに文字や文章を書いて飾るのも楽しいだろう。印刷した年賀状に筆ペンで一言添えるだけでも、自分が作った感覚が生まれる。このような場面において、教師が児童に対して筆ペンの活用を強制するのではなく、児童自らが使ってみようかなと思えるような経験をさせることが単元のねらいとし

て大きかった。これらの〈学校生活や日常生活に生きる書写学習〉がこれからの時代には、必要になってくると稿者は考えるためである。お手本通りに作品を模写し、提出する従来の書写学習では、書写嫌いを増やし、日常生活との乖離も広がっていくばかりである。“筆ペン”を伝統的で使いづらい筆記具の一種として遠い存在のように捉えるのではなく、もっと親しみやすく手軽に手に取り、生活の中で生かせるように、筆ペン指導のあり方について今後も考えていきたい。そのためには、学級活動や児童委員会の活動、クラブ活動の中でも筆ペンを使うことができるように、学級担任や委員会担当の教員などと連携しながら、積極的に筆ペンを取り入れた書字活動を提案し、カリキュラムマネジメントにも関与していくことも考えられる。また、本実践は高学年に向けて行ったため、中学年や低学年に向けた筆ペンを活用した学習活動や、硬毛連携を目標とした筆ペン指導の学習活動も今後考えていきたい。

## 附 記

本稿は、宮本真哉が全体を構想、執筆し、長屋樹廣が構想に対する助言を担当したものである。

---

## 参考・引用文献

- ・伊藤さつき(2022)「個を生かす書写・書道の授業実践 一意図と表現の繋がり」宮城教育大学大学院高度教職実践専攻 実践研究論文(令和4年度)
- ・押木秀樹(2020)『国語科書写の理論と実際』全国大学書写書道教育学会 編 萱原書房
- ・加藤祐司 他(2020)『小学 書写 五年』教育出版
- ・<sup>1</sup> 株式会社呉竹「筆ペン誕生秘話」Kuretake アート&クラフトカンパニー ( kuretake.co.jp ) (2024年1月7日最終アクセス) (2023-12-08 閲覧)
- ・宮澤正明 他(2020)『書写 五年』光村図書
- ・宮澤正明 他(2020)『書写 六年』光村図書
- ・文部科学省(2017)『小学校学習指導要領 (平成29年(2017)告示) 国語編』東洋館出版社

(みやもとまなや、ながやたつひろ／北海道教育大学附属釧路義務教育学校前期課程)